

日本調理科学会発足による家政学研究課題の変化

大妻女大家政綱田安代岡本順子大森正司, 東京農大農加藤みゆき,
 岐大教育長野宏子, 日本科技情報センター:田中功 外国文献社中村重男

〔目的〕家政学における研究は衣、食、住、すべての分野にまたがり、また、自然科学のみならず、社会科学、人文科学をも包含する。医学、農学、薬学、工学と応用の科学が確立している現在、その歴史をひもといてみると、家政学は他の諸科学の萌芽の時代を今迎えている様に感じる。高度成長から安定成長へと移行した我国においては、経済基盤こそ一見強くなったものの、逆に青少年の諸問題、老人問題などがクローズアップされ、まさに、今こそ家政学の役割りが期待される時と考える。本研究では家政学の構成と構造を明らかにする目的で、その分析ツールとして家政科学技術分類表(CHE)を作成し、要素技術連関、国際比較、歴史的変遷などを検討してきた。今回は1985年1月に日本調理科学会が独立発足したのに伴い、家政学における研究がどの様に变化したかを分析し、知見が得られたので報告する。

〔方法〕1984～1986年まで3年間の家政学会大会講演要旨集の全発表論文1294件を対象として分析した。家政科学技術分類表(CHE)を用いて発表論文をインデクシングし、機械集計、出現頻度と連関度を求めた。

〔結果〕①発表論文の数の上からは1979年以来450編以上500編近く発表されたものが、'85年は399編と減少、'86年で450編近くにもどる傾向がみられた。これは分野毎においても同様の結果であった。②標数の出現頻度においても当然ながら調理関係が減少し、'86年では5～6個の標数を付与されたものももっとも多く認められた。